

生きづづから はじまる未来

祝
カブカブ分室
5周年
（開業17周年）
記念トーク

鈴木勲滋（地域作業所・カブカブ所長）

伊藤英樹（宅老所・井戸端げんき代表）

菅原直樹（Oibokweの主宰）※後半より飛び入り参加

司会 藤原ちから（編集者／批評家／Brick&Co主宰）

「障害」や「老い」はネガティブなものとして扱われがち。隔離されたり管理されたりして、社会の片隅に追いやられてきた。しかしそこには、急ぎ足の人たちが置き去りにしてきたような、新しい価値や輝きや、未来への種があるんじゃないかしら……？

ロックンロールな木更津の宅老所・井戸端げんきの伊藤英樹さんをお迎えし、これまた粋からハミ出がちな地域作業所カブカブの鈴木勲滋所長が迎え撃つこのガチンコトーク。途中から「老い」演劇のワークショップを岡山で展開する菅原直樹さんも飛び入り参戦し、すわ場外乱闘か……という白熱のバトルに！

というのは半分冗談ですが、なにはともあれ、「障害」「老い」「演劇」「社会」などをめぐりながら、それぞれの現場から未来を構想する、熱いトークをお届けします。

「井戸端げんき」とカブカブの出会い

藤原 みなさま、こんにちは。今日はカブカブひかりが丘17周年記念であると同時に、分室の5周年記念のイベントです。

さて、なぜ今回、伊藤さんにお声をかけたのか、そのあたりから伺いたいたいですか。

鈴木 木更津で「吹く詩の宴」というイベントがあって、どういうイベントかという「福祉業界の変わり者」を呼んでトークをするというイベントなのですが、伊藤さんが実行委員をされていて、2008年の宴のとき、カブカブの前の運営委員長だった最首悟さんに話を聞きたいと伊藤さんから声をかけてもらったんです。そのうちに「鈴木さんも話してよ」ってなって、僕が木更津に行ったのが、知り合った最初ですよ。

藤原 伊藤さんは「奇跡の宅老所」「井戸端げんき」物語」という本を2008年に講談社から出されていて、かなりカブカブに近いものを感じました。鈴木勲滋さんという人もちょっと変わった方だと僕は思っていますけど、笑、たぶん、お互いに盟友だと思ってたんじゃないですか。

鈴木 あはは（笑）。伊藤さんには、去年のカブカブ祭りにも来ていただきましたが、ベタベタ仲良くするっていうよりも、「伊藤さんは木更津でやってんだらうな」って時おり、思い出す人ですね。僕にはそういう人があちこちに何人かいて、自分がブレそうになった時にそういう人のことを思うと踏ん張れる。そんな人のひとりです。

藤原 「井戸端げんき」について、あらためて教えていただいてもいいでしょうか。

伊藤 僕は1971年に生まれて、このひかりが丘団地で10歳まで、すぐその15街区に住んでいました。鍵っ子でしたが、家に帰ると近所のおばちゃんやペランダから「おかえりー」って言ってくれるような場所です、みんなに囲まれて生きてるなって、実感しながら過ごしていました。

10歳のときに、区内の別の団地に引っ越して、時代のせいかわかりませんが、そこはイケイケな感じで結構息苦しかったですね。団地を逃げ出すように東京の学校に行きました。入れた大学がたまたま福祉の大学で、相変わらず自分が生きて行くことに前向きになれないで不器用だったものですから、福祉の職を転々としてきました。その中で辿り着いたのが千葉県の木更津市だったんです。

最初は働かないでブラブラしていたんですが、一緒に住んでいた彼女に働かないでいたことについてお叱りを受けて……それが引き金になって真面目に働き始めたんですが、その働き始めた老人ホームがどうも僕の思う福祉と違った。

でも「工場で働いているんだ」と割り切ってがんばっていたんです。

そんな最中、2001年の9月11日に飛行機がビルにぶつかるのを見て、激しく時代性を感じて、ムラムラと社会に関わりたいと思いました。そこからセミナーに行ったり本を読んだりして、その時出会ったのが「生活リハビリ」という考えでした。それは、老人ホームではなく、なるべく

家で、生まれ育ったなじみの関係の中で暮らしていくのがお年寄りにとっていちばんいいという発想でした。そういう場所を僕も地域の中でつくりたいと思って始めたのが、「井戸端げんき」という宅老所です。「生活リハビリ」は三好春樹さんの考え方なのですが、彼の講座の中にカブカブの運営委員の最首悟さんがいらっしやるセミナーがあって、それに参加して衝撃を受けました。記憶にグッと残ったんです。それからしばらく井戸端げんきで「吹く詩の宴」をやっていた時に、ああ、最首さんに来てもらいたいなあと思ったんです。でもどうやって伝えたいのか……そのあたり記憶が曖昧なんですけど、確か僕、ここに来たんですよね？

鈴木 はい。

伊藤 僕は非常に嬉しかったんです。生まれ育った場所にカブカブみたいな場所ができていて、勲滋さんが温かく僕を迎えてくださった。それで最首さんを紹介してくださって、木更津にも来てくださった。

「井戸端げんき」はカブカブとそんなに変わらないんですけど、「来る者拒まず、去る者追わず」で、閉散とした中でも温かさがこぼれるようなギョツとね。とにかく人がいつも集まってきたりいけなかったり、たくさんの人に入ったりしてもらいたいとかではなく、本当に必要な時に、必要な人が立ち寄れる場所があったらいいな。その時に、ベイスとなる場所を維持するための事業として介護保険を使っている。そこをいよいよに地域のみんなに使ってもらっているんです。

いかに笑えることにしちゃうか

藤原 「井戸端げんき」のドキュメンタリー映画をさきほど拝見しまして、認知症のお年寄りの方が日中を過ごすデイサービスということになると思うのですが、突然「ここは自宅だ」と言っていて「井戸端げんき」の所長のことをボロボロ殴るおばあさんがいて、彼が土下座して謝っているという……言わねば修羅場が結構あるんですか。

伊藤 サシで向き合っているとキツイ場面なんですけど、みんながいるのでそんなにキツくないですね。それに「井戸端げんき」はいろんな人が出入りするんで、僕らくらの年代の人でもそういうことをしてしまいう人が結構いるんです。だから「とりわけお年寄りが大変だ」という感覚はないですね。

藤原 勲滋さんもカブカブを17年もやっていれば、いろいろあると思うんですけども。

鈴木 僕らはここで「いろんな人が出会ってつながること」が面白いと思っています。僕がいつも相手にしているのは障害がある人たちですが、そういう人たちの多くは昔は座敷牢とか最近まででも閉鎖的な施設へ入れられていて、社会と隔離させられていた。つまり障害がある人たちは、社会には登場しない。まさに、存在を否定されていたんです。

厄介な「問題行動」を起こすって思われている人でも、誰だって面白いんですよ、人間って。人間の面白さを見えなくしちゃうのが、僕らの狭い価値観だったりするんで、出会って笑っちゃうのが手取り早いっていうか、笑わしちゃったもん勝ちだなんて感じてここをやっているというのがあります。いかに差別をなくすかを理屈をこねて考えることも重要なんだけど、要はつながっちゃえばいいじゃん、って。

よくこの話をするんですけど、うちの30代後半の男性メンバーで、左利きの子どもにも興味があるんですけど、つて会うたびに「言う人がいて、それは彼が前回の作業所では禁止されてたんです。見るからにおじさんが「左利きの子どもにも興味がある」って言うのはちょっと危ないって思う人がいるのは判るよね。でも禁止されればされるほどイライラがたまって、前の場所では爆発してたのね。でもここでは、話していいよって。この団地にいる方たちは、ちよつとのことではどららない人生経験豊富な人が多いですね。青山、原宿あたりのカフェの店員がそんなこと話したら捕まるかもしれないけど、ここでは「私たちの頃は、左利きも多かったよねみたいな感じで、そこから話が生まれてくるの。話が続く」と彼の話題も全く違う方にどんどん広がっていく。爆発だっではないんです。

左利きの子どもにも興味があるなんて言う人間はダメな人間だから治しなさいっていうのが、よくある福祉なんですけど、それを治さずにとりあえず成立するのを考えての面白い。人がつながるには、そこに作り話／フィクションが入ってもいいと極端にいえば思っています。そこで人がつながって「面白いな」って関係が生まれるなら。

左利きの子が気になるって言って捕まっちゃうの、お客さんとの会話が広がるのと、全然違う成り行きなのに、それが施設にいるスタッフの価値観で左右されちゃうのは、なんてひどいことだっただけで片方では思うけど、可能性だとも思うんですね。価値観さえ変わってれば、どこでもできるわけですからね。だから、他の施設では受け入れられず困った人だと排除される人がいることには「なんてことだ」って怒るのもこもつともなんだけど、怒っているヒマがあるのなら、いかに笑えることにしちゃうかって方に僕は興味がある。それにはどんな手があるかっていうことを日々ここで試している。そうすると本当にいろんな人がつながっていく。排除とは逆の流れが起こるんです。

カブカブと町の人々

藤原 今日は昼に「カブカブ音頭」を踊ったんですけど、わりと音が出ますよね。もし団地の人が「うるさい」って怒ったらやりづらくなると思うんですけど。だから団地の人に包容力があるのかなって思うんですけど……今日は団地の方もいらしてようなので、ちよつとカブカブをどう思っているか聞いてみましょうか？（笑）

鈴木 まあ、団地の人って言っても、今日ここに来てくれる人ですからねえ。ふだん、喫茶カブカブの前でリサイクル品のバザーをやっているんだけど、なぜやり始めたかという、相鉄ローゼンが第3火曜日お休みしちゃってたんです。そうするとここを誰も通らない凄まじいこ

とになっちゃう。だから、少しでも賑やかそうと思って、バザーを始めたいんです。そのうち小出しに地域の人とつながるやり方を考えてたんだけど、わーわーやるのが好きな人がいるから、太鼓を出してみようとか、笛もどうだとか、キーボードも買ったから置いてみようとか、どんなコンサートだったというね（笑）。みんな好き勝手に弾いていたら、さすがに他のお店の人に怒られたんです。「いい加減にしてくれ」って（笑）。で、そうすかかって、しーんってなると今度は「ちよつとさみしいね」って（笑）。さみしいって思わせたらん勝ちじゃん。で、「あつ、そうですよねー！じゃあ、ほどほどにします」って言って、でも今日とか相

当るさよね（笑）。地域の人が受け入れてくれることに甘んじて我慢

になってしまった。これでウケない人がいたら、連う手を考えようって。サンバでダメなら音頭だ！って。来年はワルツになるらしいんだけども。そういうふうにとにかくあの手この手を使う。

伊藤 僕から会場にインタビュースタッフも来ていいですか。（会場の人に）ここはどんな感じですか？

鈴木 最初はちよつと入りづらかった。でもちよつと入ってみたいって（笑）。

伊藤 僕、ここで10歳まで過ごしていて、昔の光景や焼き付いているけど、今はシャッターが閉まっているところもあって、70年代の商店街とは違う姿になって。

鈴木 昔はこの商店街は、入るのに支店を持ってないといけないとか、年商はどれくらいじゃないといけないとか、そうそうたる基準を持っていました。僕が来た頃は厳しい基準はなくなってきたけど。だから伊藤さんの頃は、すこかったんです。

伊藤 仮面ライダーの大きい人形があったり、遊具もあつたり……ねえ？昔この商店街にぎやかだったよねえ？

伊藤 ひとつひとつの出会いがひとりとりのとの出会いなんですけど、その一対一の後ろ側にもひとりとりのという組み合わせがいくつもあつて。最初はこの人に会いに来たはずなのに、別の人が視界に入っちゃったから、思わすつながっていく……みたいな連鎖が延々とありますよね。人間って毛肌の違う人と接触する時は警戒心がどうしても働くものだけ……。

藤原 いま、カブカブの拠点はどこにあるんですか？

鈴木 地域活動支援センターという形態の事業所が3つあります。それぞれに20名くらいの人が通っているから、メンバーは60名弱です。ケアプラザの喫茶コーナーっていうのはうちの枝の部分。斜向いのあるところの分室っていうかたちなんです。だから事業所としては3つです。

藤原 このひかりが丘に分室ができたのも、すごく大きいことだと思います。空間的に広がったし、ワークショップもできる。今日も絵本作家のミロコマチコさんがいらっしやりましたし、できることのバリエーションが増えて印象があります。

鈴木 2カ所になると、それ以上の効果もあつたりあります。最初、ここができる時は「なんだなんだ」って、まわりの商店の人も言っていたけど、2カ所目の分室ができる時は「どうぞどうぞ」ってなって、「なんならもう一店やっつてよ」っていう感じで。ワークショップも、8メートルくらい長い布にみんなで絵を描くっていうのを分室の前の通りにブルーシートを敷いてやっただけで、それもいいよって。当然、まわりの店にはお断りされていますが、なにもないよりもにぎやかになるよって。伊藤さんが住んでいた頃は、ローゼンの方から逆側の商店街の端っこが、人垣で見えなかったなんて話も聞きますが。

伊藤 子どもの頃、そっちの駄菓子とあつちの駄菓子、どっちがいいかなあって、行き来してました。

鈴木 それくらい人がいたのに、今は全然人が通ってない。少しでもにぎやかにしたいよね。

伊藤 「移動」ってすごく重要で、福祉の施設でも移動が伴わないと、発信の仕方が全く変わってくるんです。僕はあまり好きじゃないけど、朝と夕方、あらゆるところでデイサービスの車が走っています。それを見ると、本当に高齢化社会が来たなって思うんですけど、家から施設への「移動」があるから、デイサービスの車が走っている。昔だったら、要介護老人の姿で本当に見えなかった。

今はなくなっちゃったんだけど、「井戸端げんき」の近くの駅前に、フリースペースを設けたことがあつたんです。そこにお年寄りが散歩がてら、用がなくてもぶらぶらと行けるわけですよ。叫びながら歩いたり、お店のものを取っちゃったりする人もいて、僕は説明をして、ごめんなさいって町の人に頭を下げるんですけど、でもそれで結局、町の人に存在が知られるんです。それは移動が伴わないと起こらない。昔から「交易」が重要だったように、結局、人が移動するようになって状況が変わっていくんです。だから通所というシステムは大事だなあと思っているのですが、いまは老人ホームが足りないってことに話が戻って行くのが残念だなんて思う。

藤原 つまり閉じ込める方向に向かうということでしょうか。カブカ

